



くまもと・バックアップ女性の会

今から20年ほど前に発足。当時女性議員が少なく、もっと女性議員を増やすために議員として活動したい女性を応援する会としてスタート。

震災と女性たち

～語り合う！明日に向かって～

主催：くまもと・バックアップ女性の会

7月2日(土)くまもと・バックアップ女性の会企画運営のシンポジウム「震災と女性たち」が開催されました。熊本地震で被害を受けた女性4名(栗原秀子さん(御船町)、山村みゆきさん(南阿蘇村)、緒方夕佳さん(熊本市東区)、吉村静代さん(益城町))に、体験談や気づきなどを話してもらい、参加者を交えた情報交換を行う場となりました。

障がいを持つ娘さんと一緒に避難した栗原さんは、対応できる避難所がなかなか見つからなかったそうです。「福祉避難所へ一般の方が多く避難されたため、そこを必要とする人が使えなかった」という話がありました。避難する方のニーズにあった整理が必要ではなかったかと。今回の地震での成功例、失敗例を行政と市民が共有していくことがなにより大切なのではないでしょうか。

市議会議員で2歳のママである緒方さんは、議員という立場と一人のママとしての立場の葛藤の中、自分のできることは何かを考えながら活動をしていたそうです。子どもを持つ議員としての視点で、震災から学んだ事を活かせる防災を広く訴えていきたい。避難所での支援の中には、各々のニーズに答えきれないところもあったと感じています。そういった思いや、反省を次へと繋げていきたいです。

本震の際、立野病院で勤務していた山村さんは普段の防災について改めて考えさせられたそうです。「これまで火災訓練しかしてきていなかったため、地震が起きた際はただじっと揺れがおさまるのを待つことしかできませんでした。なんとか患者主員



を避難させることができ、その際に使ったヘッドライトが凄く役に立ちました。」自主運営の避難所を率先して呼びかけた吉村さんは、これからの避難所のあり方について語られました。「自分達の生活の場は自分達で整備していくことで、

交流が生まれコミュニティが築かれます。また行政の人たちもそれぞれの仕事に集中できます。それぞれが自立するためには、避難所の人達が自ら動き行動を起こすことが大切です。」

参加者からは、4人の体験談を聞いて感じたことや、震災時に役に立った物は何か、今後の生活への不安や対策について質問や、意見が飛び交いました。頭につけるヘッドライトや声が出ないときに自分の居場所を伝えられる笛、おくり手帳の常備や身体ふき、口腔ケアグッズの必要性などが話題に上がりました。

よりよき明日に向けて一人ひとりが考える時間となりました。



男女共同参画週間 ロビー展

男女共同参画週間(6月23日～29日)に併せ、くまもと県民交流館ロビーにおいてパネル展「災害と女性」を企画しました。

今年度は、熊本地震の経験を「これから」に活かすため、男女共同参画の視点からみた防災に係る啓発パネルを展示しました。

アンアン特別編集「女性のための防災BOOK」パネルは、避難生活に役立つものとして、寒さ対策や日よけになる大判のストール、使い捨てできる紙製の下着、虫よけにも使えるアロマなど日常的にできる備えの大切さをわかりやすく紹介。また、先の東北大震災を経験したせんだい男女共同参画財団から寄せられた心援メッセージや、被災から復興する人々の姿や言葉を紹介しました。

この他、東日本大震災女性支援ネットワーク作成の「こんな支援が欲しかった！現場に学ぶ女性と多様なニーズに配慮した災害支援事例集」を掲示し、例えば、避難所に女性のリーダーや行政職員がいるとニーズが伝えやすくなることや、被災者同士で託児し合い片づけなどを効率的に行ったことなど、多彩な事例を紹介しました。

